当世噺家気質　243
春風亭昇也と「庭蟹」

昨年 11 月 1 日、最初で最後の文化庁芸術祭参加（昨年で芸術祭は終了）となった春風亭昇也の独演会のテーマは「番頭」だった。高座で演じる三席の主役が全部「商家の番頭さん」で、しかもその三人の番頭が能力も性格も貫禄も違う。「すべてがうまくいけば新人賞も」とほくそ笑んだかどうかは不明だが、昇也は持ちネタの中から「番頭もの」を選りすぐった。

小品ながら使い勝手が良く寄席や落語会で何度も演じてきた『庭蟹』を、恩返しの意味も込めて最初の一席に。近年のネタおろしをして好評だった『引越しの夢』を挟んで、真打昇進披露興行で演じようと二ツ目時代の後半から練りに練ってきた『百年目』で締めくくる。

「洒落の名人」「女好きの愛すべき俗物」「隠れ遊びができるほどの実力者」―　三人三様の番頭を、軽妙洒脱に演じ分けた昇也は今年 2 月 15 日の授賞式で、本人が狙った「新人賞」ではなく、その一つ上の「優秀賞」のトロフィーを手に、会心の笑顔を見せた。

先輩や仲間、関係者からたくさんお祝いの言葉をもらった。大先輩の柳家蝠丸からは、お祝いというより、感謝のメールだった。

「三席の中に、『庭蟹』を入れてもらって、ありがとう！」

二ツ目になってまもなくの 2013 年頃、昇也は蝠丸から『庭蟹』を教わっているのだ。

『庭蟹』は東西に関係なく、ずっと「レアネタ」だった。古今亭志ん生、桂米朝などが別の噺のまくらに使う程度で、小噺と同じような扱いだったのを、「圓窓五百噺」を手がけた三遊亭圓窓が『洒落番頭』という題で一席ものに仕立てた。蝠丸の『庭蟹』は、この圓窓型を基本に、独自の工夫を入れたものだ。

「僕は予備知識も何もなく、寄席で蝠丸師匠が演じるのを聴いて、噺の構造が面白いと感じました。番頭が洒落を連発するのに、それで笑わせないで、洒落を理解できない旦那と番頭のやり取りで笑わせる。こういう作りの噺って、なかなかないですよ」

どう延ばしても 10 分を超えない小品で、爆笑を取れるネタではないし、当然、メインディッシュにもなり得ない。それでも『庭蟹』は、昇也の大きな財産になった。何よりも「洒落のわからない旦那の無意識のツッコミ」が噺の核であるところが、噺家になる前、漫才師時代にツッコミ芸で鳴らした昇也には、しっくりくるのだ。

「面白くないボケを、面白くするのがツッコミの役目です。『庭蟹」のような単調な噺も、ツッコミの言い方次第で面白くなる。テンポ良く、リズミカルにと、あれこれ考えながら演じるのが楽しいんですよ」

昇也の『庭蟹』が寄席でウケ始めると、何人もの後輩から稽古を頼まれるようになった。二ツ目が教えるよりは、元々教わった師匠のところで学んだ方がと思い、「蝠丸師匠のところできちんと教わって」と言い続けてきた。ところが最近、蝠丸は『庭蟹』の稽古をしてくれないようだ。

「『庭蟹』はもう君のネタなんだから、君が背負って行かなきゃ」

真打になって初めての落語研究会も、「ぜひ『庭蟹』を」と自ら希望したという。（長井好弘）

☆ 長 井　好 弘（演芸評論家）
1955 年 8 月 10 日、東京・江東区深川新大橋生まれ
元読売新聞編集委員。都民寄席実行委員長。
浅草芸能大賞専門審査員。
『僕らは寄席で「お言葉」を見つけた』
『新宿末広亭のネタ帳』
『寄席おもしろ帖』
ほか著書・編書多数。
TBSテレビ主催　第五次「落語研究会」プログラムに
2003 年 3 月から「当世噺家気質」を執筆中